

# 【『斃休録』 釈文】

※適宜読点・中点を付し、旧字は新字に直した。

## 斃休録

忠告（花押）

夫我神州忠孝信義の国、往昔より他邦<sub>江</sub>是を  
譲らず、蓋方今の形勢上

天子より我君上<sub>并</sub>大小の諸侯、旗下八万、下庶  
人<sub>ニ</sub>至ル迄、何か故に欺偽を尽す、地球未た其例を  
不聞、暴徒

幼帝を擁我主を朝敵と唱、我主無罪<sub>ニ</sub>して  
恭順謝罪を哀訴す、加る<sub>ニ</sub>主家の賊吏是を

補助して自縛するか如く誠ニ抱腹に絶たり、大家の  
暗断ハ一ニ朝命難黙止を云、二ニ自家の安危を量、  
三ニ我賊吏、旗下八万の薄情・柔弱を憎面を  
斜ニして東向す、小家ハ勢ひニ压せられて是非を  
論せず、其後へニ随て己か主家ニ砲玉を向、尾越ヲ  
始として 神祖の血流堂々たるも又斯の如し、  
嗚呼人生幾多そ、 神祖無尽の業も此度

有り、事の実を知りなから、官軍と称する百万の生  
霊、来日死して己か祖宗の魂前江訴の語如何ん、  
況目前地球の各国江対し、忠孝信義の神州今日  
言行相違して君父ハ無きの国とす、国辱是より  
甚ハきなし、爰ニ於て我神州殆天地間ニ入さるの  
国とならんとするを、日月未た地ニ不落、奥羽の諸  
侯地を攘て、忽ニ会津を助義戦を挙て北越を

合セ勢ひ尤盛なり、屢官軍と争戦未央、是を愉快の美事と讚歎するのみ、慷慨痛憤ニ至てハ腐毫の及ふ所ニあらず、余苟も神州ニ生を得て、其国辱臣子の分たるを知らさらん哉、昔年鎖港攘夷の献策ニ身を投し近ニ至りてハ此災を醸の根本を除んとして、百折千磨の上言も、奸吏之を用ること不能、主家京坂瓦解、先主東帰ニ及ひても、猶長

夜の夢覚る事を不得、爰ニ至忍ニ不堪同志を募り、

此春二月廿日忠義激烈なる者、東本願寺<sub>江</sub>群集

凡百人、粗議論一錠し、且衆議ニ依て、渋沢成一郎なるもの隊長、余副長ニ択挙せられ本日はを

西城ニ訴官許を受て彰義隊と号、不日に

馳集の同志三百余人ニ及ふ、先主上野大慈院ニ

被為謹慎ニ依て、同山外の諸院ニ屯して是を

警衛ス同三月朔日成一郎ハ頭取余ハ頭取並を被命同  
四月十一日先主水戸表へ被為移、西城ハ官軍の  
有となる、百事切齒痛恨而已、主家代々の重器  
上野<sub>江</sub>運転、中堂<sub>ニ</sub>置、我隊ハ此警護を被命、猶  
輪王寺宮を兼守衛して、東台の諸院<sub>ニ</sub>屯し、  
勢ひ漸盛なり、此月中旬北陸道総督の二卿、  
浅草六郷の邸<sub>ニ</sub>有しを東台<sub>江</sub>転陣せんとす、

参謀津田山三郎兵隊一千五百を率、大小砲を携て  
山の四方を囲む、小田井蔵太と余山三郎<sub>ニ</sub>応接す、彼  
の兵山外<sub>ニ</sub>有こと三日、終<sub>ニ</sub>転陣ならすして引去、  
此時大惣督宮より我隊へ称誉の云々有、同月  
廿八日余頭取<sub>ニ</sub>被命、閏月七日頭並<sub>ニ</sub>被任、五月  
上旬<sub>ニ</sub>至我隊一千<sub>ニ</sub>およひ、附属の兵隊多し、  
左<sub>ニ</sub>誌ス、

頭

池田大隅守

小田井蔵太

同並

菅沼三五郎

春日左衛門

天野八郎

川村敬三

頭取

吉田定太郎

判門五郎

織田主膳

本多敏三郎

同並

小林清三<sup>(五)</sup>郎

大塚霍之丞

加藤帰之郎

酒井宰輔

近藤武雄

新井鏢太郎

器械掛 杉山作左衛門

兵隊

組頭

一番隊 土肥八十三郎

二番隊 管間房次郎

三番隊 松本銜吉

四番隊 鳥飼常三郎

五番隊 朽原 鼎

六番隊 浅川文三郎

七番隊 石川善一郎

八番隊 木下七郎

九番隊 大谷内龍五郎

十番隊 山崎雅五郎

十一番隊 加藤光造

十二番隊 高橋真吉

十三番隊 佐久間末七郎

十四番隊 比留間良八

十五番隊 安東勘造

十六番隊 今井磐

十七番隊 古谷万吉郎

十八番隊 西村賢八郎

遊軍隊 村越三造

小川楳太

天王寺詰 花俣鉄吉

齋藤亀吉

記録掛

組頭

金井鎖次郎

中川記代之助

齋藤金左衛門

窪田俊輔

小野安太郎

安部杖策

器械掛

組頭

松崎平三郎

會計掛  
頭取並格

田中清三郎

組頭

飯田豊之助

同  
百井求之助

本宮詰

組頭

秋元虎之助

加藤大五郎

丸毛靱負

神木隊取締

組頭

近田六郎太夫

卍隊取締

同  
百瀬雄次郎

覚王院詰

同  
高山健太郎

右組頭已上を記、

組頭ハ五十人格なり、

附属隊

純忠隊

竹中丹後守を長とス  
此隊の亦附属とも

三百余人

遊撃隊

講武所跡の遊撃隊  
分して東台に附属ス

百余人

猶興隊

堀健三郎を長とス

三百余人

八連隊

人数未詳

神木隊

榊原藩

八十余人

松石隊

明石藩

三十余人

高勝隊

高崎藩

三十余人

浩気隊

若州藩

三十余人

卍隊

関宿藩

貳百余人

臥龍隊

間宮金八を長とス

三百余人

旭隊

元横浜兵なり

百五十余人

奥山八十三郎を長とス

兵隊右の如く、幾と恢復の基業をなさんとす、京師をハ  
輪王寺宮へ

天機伺として上京を促すの御使頻なり、西城よりハ  
宮<sup>江</sup>登城可有のよし、勅詔の使節再<sup>ニ</sup>およぶ、

此時 宮断然として尊体を我輩<sup>江</sup>被委任、

俱<sup>ニ</sup>興復を被祈給ふ、誠<sup>ニ</sup>恐惶辱キ聖慮なり、

覚王院竹林僧正等と謀り、奥羽の諸侯<sup>江</sup>接し、

専恢復の祈念切なりといへとも、日往月遷る<sup>ニ</sup>随ひて

平士輕輩<sup>ニ</sup>至りてハ、唯無算<sup>ニ</sup>過激<sup>ニ</sup>而已奔りて天王寺辺  
遊歩する薩藩三人を果、或ハ三橋を通行の筑藩を

害、亦ハ附属隊、臥龍隊のもの因藩奥州<sup>江</sup>運転の

団<sup>(彈)</sup>菓数十荷、坂本<sup>ニ</sup>於て卸し是を奪、警衛士

十余人騎馬壺匹を捕、是等の事制禁嚴なりと

いへとも、如斯法を犯すの徒ありて殆困惑す、此頃

筋違門外下谷辺ニ官軍の遊歩絶てなし、閏月方  
山寨を討んと惣督府の参謀、数評京師江も  
度々伺之上、五月節句頃より屢東台討襲の催  
有、我隊下輩ハ暴激ニ奔、主家の奸吏ハ我隊を  
して他藩の如くし、亦甚敷ニ至てハ寇仇の思ひをなす、  
期末た遠く不至といへとも自然ニ不得止ものとなり  
しハ残懷此事而已、此年ハ天神州の災害を示す坎、  
早春より霖雨打続き、今五月ニ至ル迄三日の晴天  
なし、四月十七日朝、寒松院の桜木を吹き折る〔寒  
松院ハ我隊ノ本營なり〕、  
別して前月よりの暴雨甚敷山を抜、土手を破り、  
東台本坊の練壁数間を崩しぬ、是  
神祖亦ハ天海大師の凶を告るもの坎、同月十五日  
朝六ツ半頃、余と春日・小林、山外を一巡せんと広小路  
より山下通り根岸迄行し時、切通し辺ニ而大砲一声ス、

馬を天王寺脇迄駆る内ニ<sup>ニ</sup>續て七発す、池の端<sup>江</sup>来ル時ハ  
はや戦ハ始りて、穴稻荷前<sup>ニ</sup>而<sup>而</sup>神木隊二百目野戦砲  
并<sup>并</sup>小銃を以て戦、余ハ稻荷門より山内<sup>ニ</sup>入り本營<sup>ニ</sup>歸り  
池田大隅守<sup>江</sup> 神祖御影の宝物を託、 宮警衛  
として本坊<sup>江</sup>促し遣り、八門〔黒門・屏風坂門／新黒  
門・車坂門／  
穴稻荷門・新門／清水門・谷中門〕防戦の手配し、兼  
て別段余<sup>ニ</sup>  
附属する八番隊を引率し黒門口<sup>ニ</sup>向、八番の

隊長木下七郎副長寺沢觀之丞なり、此手ハいつれも撃劍を  
能し尤奮発の徒なり、一体余持場とするハ谷中  
門天王寺なれとも、同所<sup>ニ</sup>ハ敵壺人もなく黒門口の  
戦烈敷<sup>ニ</sup>依て、如斯出張ス、正五ツ頃欵此時酒井  
宰輔ハはや黒門<sup>ニ</sup>指揮をなし居し故、余ハ山王  
台<sup>江</sup>上り専大砲を差図す、敵ハ松源其他茶店の  
二階より砲発し、大砲ハ三橋先、亦ハ松坂屋前より

討出す、我兵町家<sup>江</sup>焼玉を数発するといへとも霖雨<sup>ニ</sup>  
玉湿り放火ならず、四ツ半頃より天神男坂下<sup>ニ</sup>出火すれ  
とも漸々として敵を妨の要をなさす、敵兵追々霖雨<sup>ニ</sup>  
<sup>ニ</sup>玉湿り放火ならず、四ツ半頃より天神男坂下<sup>ニ</sup>出  
火すれとも漸々として敵を防の要をなさす、敵兵追々<sup>ニ</sup>  
繰込来り放火を見て一時<sup>ニ</sup>討破んと奮戦ス、  
素より我隊恭順の趣意を破らす疆壁溝壑の  
設なく、事<sup>ニ</sup>臨んで疊式三枚ツ、楯とするのみ、  
砲玉をを防<sup>ニ</sup>不至故、討死・手負多し、余ハ谷中門の  
戦争を聞て四ツ頃同所<sup>江</sup>向天王寺前<sup>江</sup>至ル<sup>ニ</sup>同寺<sup>ニ</sup>有余か  
手の隊長小川・花俣・斎藤手勢百余人<sup>并</sup>附属之兵隊  
を以て敵を大ひ<sup>ニ</sup>破り、放火して敵壺人も無き故、本  
營<sup>江</sup>引返す<sup>ニ</sup>黒門口の激戦を註進する<sup>ニ</sup>依て、  
未だ朝の糧を食の暇あらず、直<sup>ニ</sup>馳て馬を山門の  
内<sup>ニ</sup>乗放し、山王台<sup>ニ</sup>向又防戦一時す、九ツ過  
る頃、黒門ハ酒井、山上ハ近藤武雄<sup>ニ</sup>託、本營<sup>江</sup>

歸て諸門<sup>江</sup>下知を伝ふ、間もなく黒門口殆危しと  
訴る<sup>ニ</sup>依て、亦山王台<sup>江</sup>奮出す、途中清水堂の脇<sup>ニ</sup>而  
旗下の士小川斜三郎其外撤兵歩兵の差図役旗下の  
士四十余人の荒手<sup>新</sup>逢、是多くハ純忠隊附属のもの  
なり、余此兵<sup>ニ</sup>対して曰、黒門危しと見へたり、衆人  
山王台<sup>ニ</sup>力戦すへしと、衆同音<sup>ニ</sup>諾ス、然ハ斯来り  
給へと、余真先一迅して山王台一番隊四斤砲の

際<sup>ニ</sup>至、後を顧ハ続く兵耄人もなし、此時我徳川子<sup>氏</sup>  
の柔極るを知、歎息の一暇もなく苦戦の奔走不肖と  
いへとも職掌を恥かしめず、一番隊の副長林半蔵<sup>ニ</sup>  
下知して、頻<sup>ニ</sup>大砲を討、遊撃隊伍長新開義三郎、  
海崎虎五郎外貳人を助力とし、余も車台の運転を  
手伝程の烈戦なり、酒井ハ今朝黒門<sup>江</sup>出張の俣今刻<sup>ニ</sup>  
至り暫の休足<sup>息</sup>もなし、組頭已上同人当日第一等の

奮発なり、此時台ニ討死深手産(算)を乱し、黒門の  
番小屋ハ乱玉ニ討破れ半身を置の所なし、此上一時の  
防戦無覚束見へたり、爰ニ於て兼誓ひ置八  
番隊其外撃劍の兵を率て敵陣江切入んと

欲すれとも、兵隊右往左往なる故近藤、酒井へ  
示し合、突出隊引纏として、本營をさして行ニ春日  
今朝より中堂山門ニ而已奔走し傍觀たるか如く、

此時山門裏ニ猶酒を吞居たり、是を責るの閑なく  
馳行、途ニ天王寺より援兵を乞の使ニ逢谷中口敵兵  
モリ返しの戦烈しきニ依てなり、本營江帰見れハ  
花俣自身援兵を乞ニ来れり、諸方の戦四五ヶ所の体を  
見るニ黒門口尤危く、亦谷中口破れなハ本防江甚薄く  
殆困惑す、突出隊切込み徒も此所彼処ニ散て十人ニ  
不満兵隊を算るニ下寺ニ三百の兵有を訴、是ハ今朝方

はかく敷戦ひもせさる故是を三ツニ分百八同所の守とし  
百八谷中へ援兵し、百を引て山王台ニ血戦せハ、  
暮合迄ハ可凌と分兵の為ニ下寺江行んとす、今朝  
より数刻の奔走ニ身体倦勞したる故ニ馬ニ被助  
横ニ本防前迄馳せしニ中堂脇より我兵一百余りなた  
れ来ル如何んと問ニ黒門口はや破れたりと告酒井ハ  
討死し近藤ハ腕より脇腹を被討て、新井の肩ニ

被助来ル大谷内龍五郎ハ両腕を被討貫来ル跡よりハ  
敵軍込入ること潮の湧か如く迫る事甚急なり、余此時  
鞍坪ニ突立大声を発して曰、此所 宮の門外

主家累代の廟前、勿論警衛する所の重器目前ニ有、  
爰を去て何国ニ生を欲せんとする哉、速ニ乱戦  
職掌を尽して死を潔くせよと呼わりしかハ、

大久保紀伊守なるもの 東照宮の御旗を

持て真先<sup>ニ</sup>進たり、此人年五十計り、元大監察を勤しもの也、余馬より下り元込七発炮を携同人より後るゝこと一步、其次新井鏢太郎同く一步去、跡より続く兵凡百余人と覺たり、あわや中堂脇<sup>ニ</sup>於て血戦<sup>ニ</sup>及んとする時、砲玉一発来て紀伊守か額の上<sup>江</sup>中る、此玉小銃<sup>ニ</sup>てハなく疵口三寸計り柘榴の如く見へて陣笠を討落し御旗を持ちたる俣空向<sup>ニ</sup>

倒、是を見て続く兵一百余散乱して壺人もあらず、只余と新井壺人ハ紀伊守の家来ならんか、僅<sup>ニ</sup>残るもの三人、爰<sup>ニ</sup>徳川氏たるもの<sup>ニ</sup>亦愕然たり、紀伊守未た息有を捨置<sup>ニ</sup>不忍、三人して是を荷ひ本防の門番所へカキ入ル、其内敵門外<sup>江</sup>切迫すれとも守兵壺人もなし、余と新井小門を鎖して 宮御方心元なく、

玄関より奥<sup>江</sup>行見る<sup>ニ</sup>、只今被為退し跡の体なり、

爰<sup>ニ</sup>於て御先途を奉護の外無他事、御跡を慕ひ根岸<sup>江</sup>  
出御行衛を問<sup>ニ</sup>三河島へ為落給ふと云、同所<sup>江</sup>行道すから  
後を顧ハ大小の砲声未絶、我残兵来り合本坊前<sup>ニ</sup>  
於て小戦有しよし、是ハ後の伝聞にて知りぬ、早朝  
数ヶ所の戦争多端なりといへとも、是ハ余か為す所と  
目撃する所を誌す而已なり、三河島<sup>ニ</sup>至り落行その  
中を見る<sup>ニ</sup>竹林僧正有、互<sup>ニ</sup>切齒歎息も胸塞て

言葉少なり、然る<sup>ニ</sup>僧正手を取て誘の若僧有、怪し  
けなる麻の黒衣を着し古き草履をはき、左りの  
手ハ僧正<sup>ニ</sup>かれ、右の手<sup>ニ</sup>ハ数珠を持たり、今僧正と  
余一言したるを聞て、何人と問、僧正是ハ天野八郎  
にて候と答、此時余始て 輪王寺宮御方  
なるを知る、故<sup>ニ</sup>思も落涙して再拝ス、僧正是を  
制して他見を憚る、余是を推して密<sup>ニ</sup>先途を

問、僧正曰会と答、御供を願ニ微行ニ有されハ遂トケさる  
故ニ、是を不許故ニ心中百拜して別離ス、昔年或  
誹（非）人ニ聞事有、

わらんしは斯うめすものと涙くみ

遠く聞ゆる鉄砲の音

此附合の体、今日前ニ有、独身涕泣数行なり、  
斯て有へきニあらず、追々ニ落来ル敗兵の余を慕ふ  
有、心ならずも一百計りを引連て、道灌山を越

巢鴨を横きりて音羽の護国寺ニ来ル時黄昏に

およへり、寺内ニ入て暫時憩ふ事を乞、糧の手当杯  
頼しニ快よく諾する故ニ境内の小川ニ而今朝より土泥ニ  
汚しを洗ひ、客殿ニ入て休足し、酒を呑、糧を用ひ  
たる上、進退の議論まちくなれとも、余ハ思ふ子細  
有て、府下ニ留る事と決着す、是ニ随者過半也、  
或ハ甲州路をさして落行も有、余ハ此夜九ツ頃

護国寺を出知音の方<sup>ニ</sup>行て壺式泊を宿りぬ、其他思ひ  
思ひ<sup>ニ</sup>信友知己を便りて潜伏ス、情当日の戦を考<sup>ニ</sup>、  
我兵凡二千余恭順を守て疆壁の構なく、敵ハ列藩  
廿壺家の兵隊壺万<sup>ニ</sup>近く、我東台の広サ三十万坪、守ル門  
八ツ加る<sup>ニ</sup>天王寺有、三日の防戦難叶事必せり、併一日<sup>ニ</sup>  
落へしとハ思わさりき、我兵討死一百余人、手負  
未詳、敵の討死六百余人、手負未詳、就中

他向の周旋を委任せしハ吉田定太郎、加藤帰之郎なり、  
此兩人より外<sup>江</sup>約し置兵二千余人有り、敵山寨を  
襲ふ時ハ、速<sup>ニ</sup>出兵して其後を討の譬なり、其他唇  
破て齒寒きを知らハ、旗下八万<sup>ニ</sup>於て傍觀も  
有まし杯、腰拔武士を少しハ便り<sup>ニ</sup>せしこそ、我輩の  
拙愚究る所なり、戦終る迄、堅約の式千を始、援の  
兵壺人もなし尤吉田、加藤など他向周旋の任<sup>ニ</sup>

当らざる事顕然なるを余如何んとも多忙たるニ依て  
是を委任して大事を誤是余か罪なり、嗚呼此日  
如何なる日ぞ、天海僧正忍ヶ岡を開基して我主家  
累代の靈廟を安置する事式百余年、山門・中堂・  
本坊の善美数廟の花麗、金銀・珠玉を尽しも、  
一時の兵火ニ灰尽となり三十六坊数百の僧侶一日の  
内ニ不住の乞食となる、百事算数も是ニ及へからず、

壹月計り経て、宮御方辛ふして会津江為入の

よし覚王院も御傍ニ有の報告ニ少しく愁眉を慰  
たり、我残兵所々ニ潜居て頻ニ余を慕ふて進退の  
指揮を乞、兼て心さす方も有故ニ、専帷幕の内ニ  
心機を摧キ、昼ハ深キ笠の無き事を不得、夜も地を  
荒く踏事不能、爰ニ顕れ彼しこニ潜ミ、戦々兢々  
として周旋閑なく五十余日を過し、七月十三日朝、

本所石原文次郎宅ニ於て、官軍稻田の兵數十ニ被襲、  
自尽の暇もあらず、捕となりて西城下糺問所の獄ニ  
繋からるゝ事となりぬ、夫忠告は何等の者ぞ、隊  
中ニ被推挙、爾来先ニハ渋沢成一郎と不平して彼か  
奸計の為ニ屡闇殺せられんとし、夜寸銃短剣を  
懷ニして臥一霄の安眠なし、幸ニ正邪忽判然たるニ  
依て成一ハ被廢て亡命す、余ハ追日重任を蒙るニ

随ひて百事一身ニ纏ひ、全権の辛勞他ニ異なり、主家の殿ニ  
登れハ奸吏益盛ニして上武州ニ有尾崎狐の其家の興  
廢ともニ力を添るニひとし、痛憤して山寨江帰れハ、  
輕輩ニ無心の過激有、此説諭も他江讓ることを不得、  
奴婢鶏犬の勉余か未熟ニ負ふ、好める酒も其味ひを  
不甘、瓦解ニ至て或ハ山野ニ遁村里ニ隱己か一身を安るの  
徒多しといへとも、豈是ニ天日を同ふせんや、縛を受るニ

至止むのみ、余昔年より鍍印其外物の印ニ香車を  
用ゆ、是一歩も横江行、跡江引の道無きを表るの証  
なり、東台ニ一敗すといへとも、職掌を尽して他ニ譲らす、  
府下ニ潜伏して今日ニ至、決して香車ニ不恥、天地何をか  
恐ん、磐石動へし、我赤心転はすへからず、  
断々然として、今猶前の如し、首を失ふの日、累代  
の君前ニ訴を樂む而已、亦何か有らむ、

獄ニ同囚数十人有、余を置所ハ方九尺置四枚半を敷、此内ニ  
八九人有、仙台・関宿・高田・桑名・浜田等の藩なり、隣囚ニハ  
会藩其外諸藩多し、旗下の士も混し居りぬ、我  
隊天王寺詰小川楢太、七番隊石川善一郎兩人とも  
先達て捕隣囚ニ有、是ハ擊劍を尤能ス、余か股  
肱とする輩中の式人なり、文次郎も余潜居の事ニ  
依て同く被捕て禁獄す、同人ハ実ニ憫然なる事也、

(異筆)

「月は雲くもはいすれのものならん  
さけて光りをむさしのゝ原

関宿藩

本多又助

遥望美人天一方、武原秋色転

荒涼、江頭風急浮雲擾、惆

悵無由見月光 仙藩

水科丙午郎」

北にのみ稻妻有りて

月暗し

忠告

右同囚水科、本多と七月の下澣聊

述懐を口すさみせしを是<sub>ニ</sub>誌

慶応四年戊辰秋八月  
十有七日、武陵城獄中誌  
之、

天野八郎忠告

行年三十有八

## 【『斃休録』現代語訳】

### 斃休録

我が日本は忠孝信義の国であり、往古より他国へこれを譲らない。思うに現在の形勢は、天皇陛下より我が主君（将軍／訳者注、以下同）、並びに大小の諸侯、旗本八万、以下庶民に至るまで、何故かこのように欺瞞に満ちている。全世界的に未だこのような例を知らない。暴徒が幼帝を擁して我が主を朝敵と唱え、我が主は無罪であり恭順謝罪を哀訴している。加えて幕府の賊吏はこれを補佐して自分の首を絞めているようだ。誠に抱腹絶倒である。大家の愚かな判断は一に朝命は無視し難いと言ひ、二に自家の安危を恐れ、三に幕府の賊吏、旗本八万の薄情・柔弱を睨みながら東へ向かった。

小大名は勢いに押されてやむを得ないが、その後ろに従って自分の主家に砲口を向ける尾張藩・越前藩をはじめとした家康公の血脈が堂々と流れている諸藩もこのようである。ああ、人生色々だ。家康公の大業もこの度の動乱にあっては事の誠を知り

ながら、官軍と称する百万の生霊は将来、死んで自分の先祖の魂の前で何を訴えるのだろうか。ましてや、世界の各国に対し、忠孝信義の我が国が現在、言行を違えて君父は無い国としたのだ。これより甚だしい国辱は無い。この時にあたって、我が国はほとんど天地の間に入らない国となろうとしている。が、太陽や月は未だ地に落ちず、奥羽の諸侯は地を払って、たちまち会津を助け、義戦を開始して越後の諸藩を合せて勢いが最も盛んである。しばしば官軍と戦争し、未だに止むことは無い。これは愉快な美談と讃嘆するのみである。

世を嘆き大いに憤慨することについては、拙文は及ばない。仮にも私は日本に生まれ、その国辱は家臣の分を知らないはずはない。以前、鎖国・攘夷の運動に身を投じた。最近はこの災いをもたらす根本を除こうとして、様々な辛苦を重ねながら進言しているが、愚かな役人はこれを採用しない。幕府は京阪で瓦解し、前將軍は江戸に帰るに及んでも、なお平和ボケしていることに気づかない。

ここに至り、忍ぶに堪えず同志を募って、この春、

二月二十日、忠義激烈なる者、浅草本願寺へおよそ百人が群集した。大体議論が一定し、選挙により渋沢成一郎なる者が隊長、私は副長に選ばれ、この日このことを江戸城に申請して公認となり、「彰義隊」と称した。近日中に馳せ集まった同志は三百余人に及んだ。慶喜公は上野大慈院に謹慎なされておられるので、上野山（台地）外の諸寺院に駐屯して警備した。

同（一六八六）年三月一日、成一郎は頭取、私は頭取並を命じられ、同年四月十一日、慶喜公は水戸へ移られた。江戸城は官軍のものとなった。あらゆる事が齒がゆく痛恨である。徳川家代々の宝物を上野へ運搬し、中堂に置き、我が隊はこの警固を命じられた。なお輪王寺宮（寛永寺貫主・日光輪王寺門跡の北白川宮能久親王）の守衛も兼ねた。上野山の諸院に駐屯し、勢いは漸く盛んである。四月中旬、北陸道総督の二卿（高倉永祐、副総督・四条隆平）は浅草六郷の屋敷におられたが、上野山へ陣を移そうとした。参謀・津田山三郎（熊本藩士。名は信弘）は兵隊千五百人を率いて、大小の大砲を携え、上野台地の四

方を囲んだ小田井蔵太（旧幕臣）と私は山三郎に応接した。彼の兵が山外に三日いたが遂に陣を移せず  
に退去した。この時、大総督宮より我が隊へお褒めの言葉などがあつた。四月二十八日、私は頭取を命  
じられ、閏四月七日、頭並に任じられた。五月上旬  
に至り我が隊は一千人に及んだ。所属兵は多い。以  
下に記す。

頭 池田大隅守、小田井蔵太

頭並 菅沼三五郎、春日左衛門、天野八郎、

川村敬三

頭取 吉田定太郎、判門五郎、織田主膳、

本多敏三郎

頭取並 小林清五郎、大塚霍之丞、加藤帰之郎、

酒井宰輔、近藤武雄、新井鏝太郎、

器械掛 杉山作左衛門

兵隊組頭

一番隊 土肥八十三郎

二番隊 管間房次郎

三番隊 松本銜吉

四番隊 鳥飼常三郎

五番隊 朽原鼎

六番隊 浅川文三郎

七番隊 石川善一郎

八番隊 木下七郎

九番隊 大谷内龍五郎

十番隊 山崎雅五郎

十一番隊 加藤光造

十二番隊 高橋真吉

十三番隊 佐久間末七郎

十四番隊 比留間良八

十五番隊 安東勘造

十六番隊 今井磐

十七番隊 古谷万太郎(吉)

十八番隊 西村賢八郎

遊軍隊 村越三造

天王寺詰 小川楢太、花俣鉄吉、齋藤亀吉

記録掛 組頭 金井鎮次郎、中川記代之助、

齋藤金左衛門、窪田俊輔、

小野安太郎、安部杖策

器械掛 組頭 松崎平三郎

會計掛 頭取並格 田中清三郎

組頭 飯田豊之助、同 百井求之助

本営詰 組頭 秋元虎之助、加藤大五郎、

丸毛靱負

神木隊取締 組頭 近田六郎太夫

卍隊取締 同 百瀬雄次郎

覚王院詰 同 高山健太郎

右に組頭以上を記した。

組頭は五十人格である。

### 附属隊

純忠隊 (竹中丹後守を長とする。この隊の又附属も合わせ) 三百余人

遊撃隊 (講武所跡の遊撃隊が分かれて上野山に属する) 百余人

猶興隊 (堀健三郎を長とする) 三百余人

八連隊 人数未詳

神木隊 (榊原藩) 八十余人

松石隊 (明石藩) 三十余人

高勝隊（高崎藩） 三十余人  
浩気隊（若州藩） 三十余人  
卍 隊（関宿藩） 式百余人  
臥龍隊（間宮金人を長とする） 三百余人  
旭 隊（元横浜兵。奥山八十三郎を長とする） 百五十余人  
十余人

兵隊は以上のようなのである。おおかた幕府権力回復の事業をなそうとしていた。京都よりは輪王寺宮へ御機嫌伺いとして上京を促す使者が頻繁に来ていた。江戸城よりは宮へ登城を命じる朝廷の使者が再三にわたった。この時、宮は毅然として自分の体は私へ委任され、共に復興を祈られた。誠に恐れ多くありがたいお考えである。覚王院竹林僧正（赤松光映。輪王寺宮の側近）等と協議し、奥羽の諸侯へ接触し、専ら回復の祈念をなされているといえども、時が経つに従って軽輩の兵に至ってはただ無闇に過激な行動に奔り、天王寺辺りを歩く薩摩藩士三人を討ち果たした。或いは三橋を通行する福岡藩士を害し、または附属隊の臥龍隊の者は鳥取藩が奥州へ運

搬する弾薬数十個を阪本にて奪い、警固十余人、騎馬一匹を捕らえた。これ等のことは禁制厳しかったが、このように法を犯す者がいて本当に困惑した。

この頃、筋違門外の下谷辺りに官軍の姿は全く無かった。閏四月より上野山の要塞を討伐しようと総督府の参謀は協議を重ね、京都へも度々伺って五月の節句頃よりしばしば上野山を討伐する動きをみせた。我が隊の輩は過激な暴力にはしり、幕府の愚かな役人は我が隊を他藩のように扱ひ、また甚だしいのに至っては仇敵のように思っていた。決起の時は未だ遠いといえども自然に止むを得ないこととなつていくのは惜しまれてならない。この年は我が国で災害があつた。早春より長雨が続き、今月に至るまで三日続く晴天はない。四月十七日の朝、寒松院の桜が風で倒れた（寒松院は我が隊の本営である）。特に前月より暴雨が激しく、山を通り、土手を破り、上野山本営の防壁である練り堀を十数メートル崩した。これは家康公、または天海大師の災いというのだろうか。

五月十五日朝七時頃、私と春日（頭並・春日左衛門）、

小林は山外を一巡しようと広小路より山下通りの根岸まで行く時、切り通し辺りで大砲の音がした。馬で天王寺脇まで駆けている時に続いて七発音がした。池の端へ来る時は早くも戦争は始まっており、穴稻荷前で神木隊は二百目野戦砲と小銃をもって戦っている。私は稲荷前より山内に入り本宮へ帰り、池田大隅守（長裕）へ家康公肖像画影の宝物を託し、宮の警備として本部へ行くように促した。八門（黒門・屏風坂門・新黒門・車坂門・穴稻荷門・新門・清水門・谷中門）の防戦を手配し、以前より特に私に附属している八番隊を引率して黒門口に向かった。八番隊は隊長木下七郎、副長寺沢観之丞である。彼らはいずれも剣術に優れており最も士気が高い者である。総じて私の持ち場は谷中門、天王寺であるが同所には敵は一人も無く、黒門口の戦いが激しかったので参戦した。八時頃であろうかこの時、酒井宰輔は早くも黒門で指揮を執っていたので、私は山王台へ上り、専ら大砲を指図していた。敵は松源その他の茶店の二階より砲撃し、大砲は三橋、又は松阪屋前より打っていた。我が兵が町家へ焼玉を数発打

ち込んだが長雨で玉が湿り火がつかなかった。

十一時頃より湯島天神男坂下辺りより出火したが少しずつしか燃えず、敵を防ぐことができなかった。敵は追々に繰り返して来て、放火を見て一斉に突破しようとして奮戦していた。元より我が隊は恭順の趣意を破らず防壁や塹壕の備えは無く、事に当たって豊二、三枚ずつ楯とすることしかできない。砲撃を防ぐことができないので、手負いの者は多い。私は谷中門の戦鬪を聞き、午前十時頃、同所へ向かった。天王寺前に至ると私の指揮下の隊長小川・花俣（天王寺詰・花俣鉄吉）・斎藤（同・斎藤亀吉）の手勢百余人と付属の兵隊をもつて敵を大いに破り、放火した。敵が一人もいなくなったので本営へ引き返そうとすると黒門口の激戦を注進してきたので、未だ朝食を食べる暇がない。直ぐに駆け付けて、馬を山門の内に乗り放ち、山王台に向けてまた防戦を一時行つた。

正午を過ぎる頃、黒門は酒井（頭取並・酒井宰輔）、山上は近藤武雄（頭取並）に託して本営へ帰り、諸門へ命令を伝えた。間もなく黒門口がかなり危うい

と知らせがあつたので、また山王台へ出撃した。途中清水堂の脇で旗下の侍、小川斜三郎その他の撤兵歩兵指図役に属する侍四十余人の新手に遭遇した。これらの多くは純忠隊に付属する者であつた。私はこの兵に対して「黒門口が危ういようだ。皆、山王台で力戦せよ」と言つた。皆揃つて了解した。それではこちらへ来るように伝え、私は真つ先に駆け付け山王台一番隊の四斤砲の際まで来て後ろを振り返ると、続く兵は一人もいなかった。この時、我が徳川氏の軟弱が極まっていたことを知つた。歎息の暇もなく苦戦の奔走をした。不肖私といえども職掌を恥ずかしめず、一番隊の副長林半蔵に下知して盛んに大砲を撃ち、遊撃隊伍長・新開義三郎、海崎虎五郎ほか二人を助手として、私も砲車台の移動を手伝うほどの激戦であつた。酒井は今朝、黒門への出撃のまま、今に至つても少しの休息もない。組頭以上の者で酒井はこの日第一等の奮戦である。この時、甚だ討ち死にし、深手を負う者らは算を乱していた。黒門の番小屋は激しく砲撃を受けて崩壊し、半身を置く所もない。この上、一時の防戦も覚束なく思わ

れた。ここでかねて誓っていた八番隊その他の撃剣の兵を率いて敵陣に斬り入ろうとするも、兵隊は右往左往しているのです。近藤、酒井と示し合せ、突出隊を引き纏めて本営に向かった。

春日（頭並・春日左衛門）は今朝より中堂・山門にのみ奔走し傍観しているに等しい。この時、山門裏で酒を飲んでいた。これを責める暇もなく駆け抜けた。途中で天王寺より援兵を乞う使者に会った。谷中口は敵兵が盛り返し、戦いが激しくなっているからだという。本営へ帰ってみると、花俣（天王寺詰・花俣鉄吉）自身が援兵を乞いに来た。諸方の戦い四、五ヶ所の様子を見ると、黒門口が最も危うく、また谷中口が破れると本営の防御が甚だ薄くなり、ほとんど困惑した。突出隊の斬り込みの連中もそこそこに散って十人に満たない。兵隊を数えると下寺に三百人がいるという。これは今朝よりははかばかしい戦いをしていないためである。これを三つに分け、百は下寺の守りに、百は谷中への援兵として、百を率いて山王台で決戦すれば暮れまでは凌ぐことができるであろう。分兵のために下寺へ行こうとした。

今朝より数時間の奔走で身体の疲労のために馬に助けられ、横になりながら本坊前まで駆け付けると、中堂脇より我が兵百余りがなだれ来た。「どうしたのだ？」と問うと黒門口が破られたと言う。酒井は討ち死にし、近藤は腕より脇腹を撃たれて新井（頭取並・新井鐮太郎）の肩に助けられて来た。大谷内龍五郎（兵隊組頭・九番隊）は両腕を撃ち抜かれて来た。後よりは敵軍が津波のように突入してきた。迫るところは甚だ急であった。私はこの時、馬の鞍坪に立ち、大声を上げて言った。「こここの宮の門外は徳川家先祖代々の墓所はもちろん、警固する所の宝物もある。ここを去ってどの国で生きようというのか！速やかに乱戦のなか役割を尽して死を潔くせよ！」と呼ばわったら、大久保紀伊守なる者が東照宮の御旗を持って真つ先に進んでいった。この人は五十歳ばかりで元大監察を務めていた者である。

私は馬より降り元込七発銃を携え、同人より少し後れ、その次に新井鐮太郎が言うには「少し後より続く兵は凡そ百余人ぐらいと思われる」とのこと。もう少しのところで中堂脇にて決戦に及ぼうとす

る時、砲弾が一発、紀伊守の額に当たった。小銃ではないので、傷口九cmばかりで柘榴のように見えた。陣笠を落として御旗を持ったまま仰向けに倒れた。これを見て続く兵百余人は散乱一人もいなくなつた。ただ私と新井、紀伊守の家来であろうか三人が僅かに残っていた。ここに徳川氏たるものにまた愕然とした。紀伊守は未だ息があるので捨てておくのは忍びない。三人でこれを担ぎ、本坊の門番所へ入った。そのうち敵は門外へ切迫したが守兵は一人もいない。私と新井は小門を閉じた。輪王寺宮公現法親王が気がかりだったので、玄関より奥へ行つてみると、ただ今退かれた後のようであった。この時、行き先を守護するほか仕方ないであろう。後を追つて根岸へ出て、行方を聞くと三河島へ逃げていったという。同所へ行く途中、後ろを振り返ると、大小の砲声が未だ絶えていない。我が残兵も来たので合せて本坊前にて小規模戦闘があつたとのこと、これは後の伝聞でしつた。早朝より数ヶ所の戦争があり多忙であつたが、これは私が見聞きしたことのみを記したものである。

三河島に至り、落ちていく者たちの中に、竹林僧正がいた。互いに悔しがり、溜息をついた。胸が塞がり言葉が少ない。僧正の手を取って誘導する若い僧がいた。怪しげな麻の黒衣を着て古い草履を履き、左手は僧正に引かれ、右手には数珠を持っていた。今、僧正と私が一言言葉を交わすのを聞いて、「どなたですか？」と聞いた。僧正は「この方は天野八郎です」と答えた。この時、私ははじめてこの方が輪王寺宮であることを知った。思わず落涙して再拝した。僧正はこれを止めて「他の目を憚るので」といった。これから察して密かに行き先を聞いた。僧正は「会（会津の意）」と答えた。お供を願うとお忍びなければ辿りつけないので、許されなかった。だから心中で百拝して別れた。昔ある俳人に聞くことがあった。

「わらんじは斯うめすものと涙ぐみ 遠くきこゆる鉄砲の音」。

これは附合（符牒？）のようだ。今日の前にあって独りで少し涙を流している。このようにあってしかるべきではないのか。追々に落ち延びてくる敗残兵

は私を慕うものがある。心ならずも百人ばかりを引き連れて、道灌山（荒川区西日暮里）を越えて巢鴨を横切って音羽の護国寺に来る。黄昏時になった。寺内に入って暫く休ませてほしいと願い、食料も願うと快諾してくれたので、境内の小川で今朝よりの泥汚れを洗い、客殿に入って休憩し、酒を飲み、食事をした。その上で今後どうするかを議論したが意見はバラバラであった。私は思うところがあつて、東京府（一八六八年七月十七日（新暦九月六日）に「江戸府」は「東京府」に改称）に留まることと決めた。これに従う者が過半数いた。あるいは甲州路を落ちて行く者もいた。私はこの夜午前〇時頃、護国寺を出て知り合いの所で一、二泊した。その他思い思いに親友知己を頼つて潜伏した。

よくよくこの日の戦いを考えると、我が兵は約二千余人は恭順を守っており、防壁を造つてもいない。敵は二十一藩もの兵隊一万人近くいる。我が上野山三十万坪の広さがあり、守る門は八つあり、更に天王寺もある。三日間防戦することは絶対無理である。う。しかし、一日で落ちるとは思つてなかつた。我

が兵討ち死に百余人、負傷は未詳である。敵の討ち死に六百余人、負傷は未詳である。特に外部との折衝を委任したのは、吉田定太郎（頭取）と加藤帰之郎（頭取並）である。この両人より外で約束しておいた兵二千余人がいた。敵が上野山を襲う時は、速やかに出兵してその後ろを討つという約束であった。その他、「唇破れて（亡びて）齒寒きを知らば」（互いに助け合う関係にある者の一方が減びると、他の一方の存在も危うくなる例え）、旗本八万でも傍観もしないであろうとどと腰抜け武士を少しでも頼りにしたことが私が愚かであった。戦い終わるまで、固く約束した二千をはじめ、援護の兵一人もなかった。尤も吉田、加藤など外部との折衝の任務をしていないことが明らかなることを私がどうしようもないほど多忙であつたので、これを委任して大事を誤つたことは私の罪である。ああ、この日はいかなる日だ。天海僧正が忍ヶ岡（寛永寺）を開基して、我が主家累代の霊廟を安置すること二百余年。山門、中堂、本坊の善美を尽し、諸堂は華麗、金銀・珠玉を尽しているが、一時の兵火に灰燼となり、三十六坊の数百の僧

侶は一日のうちに住む所のない乞食となった。様々なことを計算してもこの結果には及ばないである。

一ヶ月ばかり経て、輪王寺宮はかろうじて会津へ入られたとのこと、覚王院も御側におられるとの報告を受けて、少し安心できた。我が敗残兵は処々に潜んでおり、頻りに私を慕って行動の指揮を仰ぎに来た。かねて志す方もあるので、専ら帷幕の内でも心を尽くしていた。昼は深い笠を被らないことはなく、夜も大きな足音を立てることはできなかった。ここに現れ、そこに潜んで、恐れてびくびくしており、動き回る暇もなく五十余日を過ごした。七月十三日朝、本所の石原文次郎宅において、官軍稲田（徳島藩洲本城代家老稲田家）の兵数十人に襲われ、自害する暇もなく捕らえられた。江戸城下の糺問所に獄に繋がれることとなった。

私忠告（天野八郎）は何程の者か。隊全体から推挙されて以来、その先には渋沢成一郎と決裂して、彼の奸計のためにしばしば暗殺されそうになり、夜は小さな銃や短剣を懐に入れて寝たので一日も安眠できなかった。幸いに正邪は直ぐに判然としたの

で、成一郎は罷免され、私は日を追うごとに重任を命じられるに従って、万事が私の身一つに覆い被さり、全権の苦労は尋常ではない。主家の屋敷に参上するとずる賢い役人が益々威勢を張っており、上州（現群馬県）・武州（現埼玉県と東京都の一部）にある尾崎狐（妖狐。尾裂狐とも）のその家の興廃と共に協力することに等しい。大いに憤慨して上野山に帰れば軽輩の者に考え無しの過激な者がいる。説得しても考えを変えることはできなかつた。奴婢や鶏犬のような務めをせねばならないことは、私の未熟さゆえである。酒もその味を感じられない。

上野戦争の惨敗により山野に逃れ、村里に隠れ、自分の保身を考える者が多いが、どうしてこれと同じことができようか。捕縛されるに至って終わりである。私は昔から槍印、その他の物の印に香車（※イラスト）を用いている。これは一步も横へ行ったり、後ろへ引く道は無いことを表している証である。上野山で一敗したとはいえ、職を賭して他には決して負けない。

東京に潜伏して今日に至る。決して「香車」に恥

じず、天地も恐れぬ。大岩をも動かしてみせる。私の真心は変えることはできない。断然、今もなお以前と全く変わっていない。処刑される日は歴代將軍の霊前に私の真心を主張することだけが楽しみだ。他に何かあるうか。私と同じ獄には数十人の囚人がいた。私の場所は約二七三cm四方あり、四畳半の畳が敷いてある。この内に八、九人がいた。仙台、関宿（現千葉県野田市）、高田（現新潟県上越市）、桑名（現三重県桑名市）、浜田（現鳥取県浜田市）等の藩士である。隣の獄には会津、その他の諸藩が多い。旗下の侍も混じっている。我が隊の天王寺詰の小川相太、七番隊の石川善一郎の両人とも先達で捕らわれて隣の獄にいる。これは剣術を最も得意とする。私の最も頼りになる部下の二人である。文次郎も私を匿ったことによつて同じく捕らえられている。実に憐れむべきである。

月に雲が浮かぶ。雲の切れ間から光を武蔵野の原に差しているあの雲は何れのものだろうか。

関宿藩 本多又助

美人が天の一方を遥かに望んでいる。武蔵原の秋色は一転して荒涼となった。入江の側の風が急になり浮雲が騒いでいる。嘆き悲しむ月光を見る理由は無い。

仙台藩 水科丙午郎

北の会津等の東北諸藩だけが官軍に抵抗しているというが、先行きは暗い。 忠告

右は同獄の水科、本多と七月の下旬、いささか述懐を口ずさんだものをここに記す。

慶応四年戊辰（一八六八年）秋八月十七日 江戸城  
獄中にてこれを記す。

天野八郎忠告  
満三十八歳

（文責 高岡市立博物館 仁ヶ竹）